

書評

小倉紀蔵著 『群島の文明と大陸の文明』  
日本文明の本質と価値を解明

評者 大橋健二 鈴鹿医療科学大学講師



大橋健二氏

ひと昔前の話になるが、世界的に大きな論議を惹起したサミュエル・P・ハンチントン『文明の衝突』(一九九六年)は、世界の主要文明を八つ――西歐・イスラム・ラテンアメリカ・ヒンドゥー・ロシア正教会・アフリカ・中華・日本――に分類した。世界八文明の一つに「日本文明」が挙げられたことで、偉大な日本文明が世界に認知されたことと欣喜する、あわて者の保守派論客も少なからず存在した。しかしここで語られた日本文明は、必ずしも好意的なものではなかった。日本文化は「高度に排他的」であり、そこには他国と共有されるべき普遍的な宗教やイデオロギーがない。そのため世界の国々にそれを伝達して共通の文化的な関係を築くことができない、特殊かつ排他的な「孤立文明」とされていた。

大文明たる「大陸文明」との比較で日本文明を「群島文明」と形容する本書は、日本の「孤立

文明」を相対化し、同時に、新たな視点から日本文明の本質と価値を解明しようとする。著者は韓国哲学・思想の専門家だが、比較文明学会の会員としても広く活躍している。日本における比較文明学の先駆者・山本新(一九三二―八〇)は一九六〇―七〇年代に発表した論文集『周辺文明論』(刀水書房、一九八五年)でこう言っている。

「近代西洋的『大文明』対非西洋的『周辺文明』というのが比較文明学の基本枠組である。しかし従来の研究のように、『大文明』を優越的なものと見なし、『周辺文明』を一方的・二元的に裁断する愚を犯してはならない。『近代西洋―非西洋』の『中心―周辺』という西洋中心主義の概念枠組で文明を考察する『垂直的な軸』のほかに、西洋以外の周辺文明同士を比較する『水平的な軸』が絶対的に必要である。

本書のタイトル「大陸の文明」と「群島の文明」は比較文明学の基本枠組(中心―周辺)という「垂直的な軸」を踏まえる。一方で、かつては中国文明、いまやアメリカ発グローバルリズムという名の西洋文明にどうぶ

り嵌まった日本と韓国という「周辺文明」すなわち日本―韓国という「水平的な軸」から日本文明を照射し考察する。これができるのは現代日本では著者の右に出るひとはいない。

二十世紀最大の歴史学者の一人とされるフェルナン・ブローデルは、文明を集合心性的なものとも考え、それは一連の社会・経済を大きな変化も

なく生きつづけ、しばしば波瀾万丈ともなる激動する歴史のなかで世代から世代へと伝えられていくとした(『文明の文法―世界史講義』一九八七年)。表層の社会的変動とは別にその中心を貫く不動・不変なものとして、文明には当然ながら精神的なものも含まれる。

これらの点から本書を見てみよう。著者は日本の文明・文化・思想の本

質は「アニミズム」的な生命観、精神性にあると見る。その中核にあるのが日本独特な「美的生命」(第三の生命)である。著者によれば「生命」は三種類に区別される。

「第一の生命」生物学的・肉体的生命(個別的・客観的・相対的・物質的生命)。  
「第二の生命」霊的生命(普遍的・絶対的・宗教(精神)的・非物質的・集団的生命)。  
「第三の生命」美的生命(間主観的・偶発的・《あいだ》的生命、「いま・ここ」しか存在しない生命)。

「あいだ」の第三の生命

共創する東アジアへ

第一はともかく第二の生命の《霊的生命》という言葉をやや違和感があるが、日本文明に固有な特質を「美的なもの」とするのは外国の研究者によく見られる。上智大学で「死の哲学」を講じ、日本における死生学の第一人者で二〇二〇年九月に亡くなったアルフォン

ス・デーケンも日本には「生の美的側面」への圧倒的な関心があると指摘する。現代世界が「有用価値や道具価値」を「生命価値や有機体的価値」の上位に置く「功利主義的文明のエートス」で覆われてしまったこと、これをデーケンは深く嘆いた。一方で、アジアがもつ固有のエートス、とくに日本に顕著な「美のエ

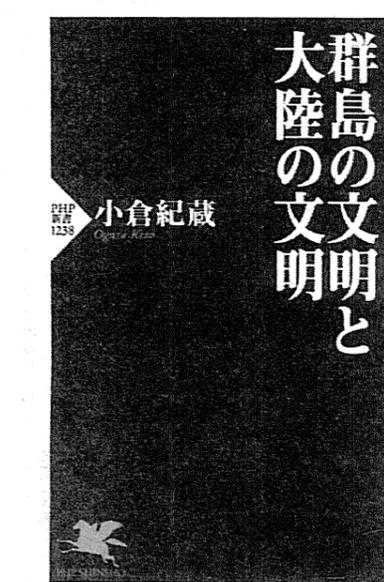
ートス」に言及し「高度に発達した日本の美的エートスは、西洋文化では大部分眠ったままの人間の豊かな潜在的な能力を、欧米人に明らかにする役割を果たすことができる」と言った(『人間性の価値を求めて』阿内正弘訳、春秋社、一九九五年)。

デーケンは語るのには感賞的・芸術的な「美」(美的感受性)というものであったが、著者は韓国語で宇宙的・普遍的な美をあらわす霊的生命的「アルムダプタ(ulmul)」との対比で、平安時代中期の『枕草子』や『源氏物語』で使用された「をかし」や「あはれ」、あ

るいは「幽玄」「わび」「さび」「いき」などを美的生命的な「第三の生命」の言語化だとする。生命を三つに区別するのは著者独特の世界観による。本書の中心テーマとなるのはこの「第三の生命」で、それは「ひとびととの《あいだ》やひとやものとの《あいだ》に偶発的に立ち現れる《い

ち》」のことを指す。米田や中国など大文明「大陸文明」に代表される軍事的パワー的な「第一の生命」や普遍的な理念パワー的な「第二の生命」は他者を圧倒し支配下に置くこととする傾向を免れない。これに対し、自己と他者(ヒト・モノ)との《あいだ》に偶発的に立ち現れる、《第三の生命》を核とする日本的な「群島文明」を著者は高く評価する。群島文明は大陸文明を排除し忌避するのではなく、これを《包越(包摂)し越える》とするからである。

著者は「偏狭なナショナリスト」たることを断固拒否するが、世界を「大陸文明」型から、日本的な「群島文明」型へ変えていかなければならないと語る。「新しい文明を日本から始めなう」というのが、著者の志である。ここに学者・研究者の枠にはおさまらない、時代救済の志をもつ思想家としての著者の熱い情熱を見る。



「《あいだ》の哲学」――金主幹によれば正確には「《あいだ》からの哲学」――と不可分の関係にあることを知れば、それは杞憂というものだろう。この哲学は《個》に収斂する自己没頭的なものでは決してなく、異なるもの同士が互いに媒介し合い、自己と他者とを繋ぎ・結び・超える動きをなすからである。

今日のマネー資本主義による世界支配下、格差社会に伴う分断と異質な他者への不寛容が蔓延する現代世界において、群島的な《第三の生命的》《あいだ的》文明を日本が率先して世界に提唱すべきこと。これを韓国をはじめとする東アジアの人々と「共に」創り上げていくべきとする「共創する東アジアへ」という訴えは、東アジアのみならず新型コロナで閉塞し黒雲漂う日々と未来への不安に生きる世界の人々、巨大な災厄に呻吟する現代文明に対し一条の明るい光をもたらしてくれるように思える。

他方、「第三の生命」を「永遠の生命」とは異なる美的な「瞬間の美の《い

ち》」の《い》は《い》

ち》の《い》は《い》